

暗い森

上卷

加賀乙彦



新潮社

おぐら もり
小暗い森 上巻

発行 1991年9月25日

著者 か が おとひこ
加賀乙彦

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話(03)3266-5111業務部／(03)3266-5411編集部

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Otohiko Kaga 1991, Printed in Japan

価格は函に表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-330805-2 C0093

小暗い森*目次

第一部 子供部屋 5

第二部 涙の谷 245

装
画

野
田
弘
志

小暗い森

上巻

第一部 子供部屋

暗い家の中でぼくは女に抱かれている。黄色い光が女のざんばら髪と日焼けした頬に落ちていく。「オンモへ行きたい」とぼくが言ったのに、女はオンモという幼児語を知らなかった。ぼくは苛立つて「オンモ」と女の腕をゆすぶる。母が、「おもてへ連れて行つて欲しいのよ」と説明してくれた。眩しい外の世界が見える。街路樹の緑は油絵具をこすりつけたように濃く分厚く、影は蜜のようにつややかである。人も車もなくあたりは静まり返っている。が、何かがやって来る予兆はあつて、大通りはそれを待ちかまえて生き物のように息を殺し、死んだ振りをする。

それはぼくの遠い記憶であつた。人生で最初のとは断言できないが、随分幼いころの思い出であることは間違いない。ぼくは小さくて、女に軽々と抱かれていた。あるとき、母にこれについて話すと、「その人はミヤジと言つてね、夏の間だけ、家に留守番に来てくれた婆やだよ」と言つた。ぼくが二つか三つになってから、毎年夏になると母と一緒に逗子にある脇家の別荘に滞在したという。何かの用で、母はぼくを連れて東京に戻ってきたのだ。

ミヤジという婆やがどんな人であつたか何も覚えていない。顔貌かおかたちも年齢も思い出せない。しかし彼女の木綿の着物のごわごわした触感や胸元から立ちのぼる魚に似た体臭は際やかであつた。ぼくが生れたのは芝三田綱町の母方祖父時田利平の病院であつた。祖母の時田菊江の日記にその時のことが記されてある。

昭和四年四月二十二日月曜日

午前四時半初江より電話で出血をしたと言ふ直ちに自動車にて来る利平様初孫としてはりきりたまひあるうち八時一寸前より痛み出し九時十分男子出産母子ともに健午前脇の姉来り小暮は会社休まれずとて電話あり夕刻に来る

四月二十八日日曜日

今日けふは小暮の赤ん坊の御七夜にて赤飯にて会食す悠太と命名す脇の姉風間夫妻来る小暮は活動写真にて撮影するが室内暗しとて電球四つ点し赤ん坊驚き泣く赤ん坊目大きく祖父と母とに似たり

父方の祖父母は早く亡くなつていたので、祖父祖母と言へば母方の二人を指すようにぼくは習慣付けられていた。母の里である三田へ行く、三田に電話を掛ける、三田から何かを言つてきたという言葉が頻繁に耳に入つてきた。そして今でも、三田と聞くと、何か懐しい幼年時代が呼び覚まされる気がする。

ところで、ぼくが育つたのは淀橋の西大久保二丁目の、明治の末に建てられた古い家であつた。武家屋敷風の大きな玄関に控えの間を備えたこの家は、“改正道路”と呼ばれる大通りに面して

いた。それは鈴懸の並木と歩道を備えた舗装道路で、池袋と新宿と渋谷という三つの盛り場をつなぐ幹線道路で、のちに明治通りと呼ばれるようになった。もともと当時は自動車も少く、車と言えば青バスやタクシーが時々通る程度だったし、たまに馬車なんかも通っていた。馬車は近隣の田舎から肥料用の糞尿を汲み取りに来るので、肥桶を満載し臭気を撒き散らし、カッポカッポというのんびりした蹄鉄の音を響かせ、おびたしい馬糞を路上に残した。

大通りは北から南へとだらだら坂になっていて、坂を下り切ったところを新宿角筈から来る市電の線路が横切っていた。市電は大久保の車庫の前を通過して東大久保の高台へと喘ぎながら登っていき、エンジンの出力が増したときの、グーンと腹に伝わるような音をぼくの家まで響かせた。

大通りはまた、戸山ヶ原練兵場と代々木練兵場をむすぶ軍隊道路でもあって、兵隊や戦車の往來が頻繁にあった。真夏の炎天下の行軍では小休止した兵隊たちが水をもらいによく門の中に入ってきた。革と汗と男の体臭が台所に充ち、母や女中のときやは、水道より冷たい井戸水を提供しようとせつせとポンプの柄をこいだ。時折、何もかも叩き潰す圧倒的な轟音をたてて戦車の行進があり、ぼくは大急ぎで門前に出て熱心に見物した。軽戦車、中戦車、重戦車、水陸両用戦車など、あらゆる種類の戦車を、ぼくは小さいときから見ることができた。

夜になると交通はまれになり、大通りはシーンと耳底まで張り詰めた静寂に鎖ざされた。時折線路を這う市電の地鳴りと新宿の貨物駅あたりから空を飛んでくる汽笛の悲鳴が、ぼくをさまざまに物思いにいざなった。都会は闇の中で拡大し、果しない大森林のように不可思議なひろがりを持ってくる。ぼくは大通りが大森林を貫いてぐんぐん伸びていき、そこを風の精が走っているのを想像した。風の精は透明で形のないものだが、将棋の飛車のように素早く目的地へと移動するのだった。

そこで例の記憶に現れてくる大通りは、真夏の真昼の光輝と明確さをそなえていながら、どこかに真夜中のような静寂をたたえていたのに気がつく。大通りが息を殺して待っていたのは風の精のような自在な通行人であつて、どこへでも行きたい所に行き着く、ぼくにとっては全能の恐ろしい存在なのだった。

恐ろしい……そう、夜の大通りは恐ろしいものに充ちていた。何よりも人さらいだった。

「子供は、夜、外へ出てはだめよ。人さらいがいるんだからね」と母は口癖のように言っていた。もつとも人さらいがどんな人物であるかをぼくは想像できず、多分そのせいだろう、御伽話か何かで聞いた風の精を人さらいになぞらえていたのだ。

そこで浮び上るのがもう一つの古い記憶だ。客が大勢いて、ぼくはソファによじのぼり、菓子か何かを食べている。大人たちは楽しげに談笑していたが、不意に沈黙が来た。しずもりの中に外の物音が聞えてくる。下駄、拍子木、チャルメラ、何か淋しい夜の遠音だ。「もうおそいから寝なさい」と父が言う。客の誰かが「ほら、人さらいが来るよ」とおどかした。それが父や母でなかったことは確かだ。父や母なら、ぼくが人さらいを恐れて、そのため独りで寢床に入れなくなるのを知っていて、冗談にでも夜の話題にはしなかったからだ。ぼくは震えあがり、ますます寢室に行けなくなる。すると客が、「ほら」と威嚇するような声を立てる。そのとき、遠くから鐘とサイレンの音が近付いてきて、やがて切り裂くような音量になって迫ってくる。それが消防自動車であり、聞き慣れた音だとは知っていたくせに、恐怖が先に立ってぼくは風の精が消防自動車に化けて襲来したと思ひ込み、全身を引き攣らせ、泣き叫ぶ。驚いた母がぼくを抱きあげてくれ、それで一安心したものの、いじわるな客への当て付けで、ぼくは泣き続ける。泣き続けてやる。

家から三田へ行く方法は二つあった。まず大通りを自動車で行く。流しのタクシーを呼び止め、

母が値段の交渉をした。「三田の綱町五十銭」「五十銭はやすいや、六十銭に奮発して下さいよ」交渉が成立すると乗りこむ。その頃タクシーは英国製の大型車をつかつていて、客席の前に補助席が飛び出すので、ぼくはそこに膝をついて前を見ながら乗るのが好きだった。祖父が自家用車を迎えに出してくれるときもあった。こちらは背の高い米国車で、運転席の隣に坐り、高い所から街を見下ろして楽しんだ。まるで家の前の船着場から船出するように自動車はなめらかに発車した。ゆたかな緑が板塀や竹垣の上を飾る住宅街を抜けると、けばけばしい新宿の繁華街を突っ切る。鉄筋コンクリートのビルは百貨店や映画館に限られていて、大部分は背の低い店屋の連なりであつたが、派手な看板や明滅するネオンサインは軒並みにかかげられていた。百貨店の一階にバーがあり、濁った水のような窓に人影が静止していた。さまざまな服装の群衆が歩道や横町を歩いていて、ぼくも、大人になつたらあのように自由にこの町の隅々まで歩いてみたいと思つて目を凝らした。自動車は大抵、明治神宮の裏参道から外苑に入つたが、外苑に入る手前に丸く迫り上る陸橋があり、ここをスピードをあげて通過すると、ふわっと体が浮き上るような面白い感覚が来るので、その近くに來るとぼくは身構へして感覚の襲來を待った。年寄の運転手などがわざわざスピードを落して橋を渡るときなど、本当にがっかりした。

ついで新宿から省線で田町まで行く方法がある。新宿駅までは歩くのだが、母は市電の線路伝いに行く近道を取るのを常とした。家の近くの新田裏から新宿の角筈までは、線路は家々のあいだに割り込み、洗濯をする女の姿、ラジオや三味線の音、カレーや焼魚の匂いが住む人の生活をあれこれ想像させた。電車が來ると、母はぼくを電車の背をむけて立たせ、動かぬように指示して、やり過ぎさせた。背中に受ける風圧と脚から腹へと貫いてくる振動に怖じているぼくに、母は「独りではゼツタイここを通つちゃだめよ。轢き殺されちゃうよ」と言い含め、「でも、今度の車掌さんは何も言わなかったね。いい人だよ」とうまく悪戯に成功した子供のようにな舌をペロッと

出した。事実、ときどき窓が開き、車掌が、「こらっ、ここはツウコウキンシ」とか、「ツウコウイハンだよ」とか怒鳴るのだった。

角筈の停留所からはすぐ目の先に新宿駅の角張った正面が望まれた。改札口を通ると階段をおり、地下の溝の底のような通路、白い壁の上方に磨硝子の明り取りを配した通路が伸びていた。その途中にある便所でちよつとした事件がおきた。それもずつと古い記憶らしく、ぼつと闇にスポットライトを当てたように鮮明に思い起される。白いペンキの塗られた扉の前にぼくは立つて用便中の母を待っている、母から「大事なもんだから、ちゃんと持っていてね」とあずかったハンドバッグを腕にきつく抱きしめて。すると、上のほうから男のやさしげな微笑がおりてきて、「坊や、お利巧だね。それ、おじさんが持つてあげよう」と言い、ぼくは大人への信賴の念からハンドバッグを手渡す。すると母が出てきて、初めて自分が大変な失敗をしたと気がつくのだ。そのあと、母がどうしたか、ぼくは覚えていない。ただ、脳裡に焼きついているのは、犯人がきちんと背広を着こなし、丁度父に似た恰幅のよい紳士で、微笑と言いい、物腰と言いい、柔かな語り口と言いい、ぼくを疑わせる徴候は何もなかったことである。

医者祖父は、白衣を着て、口髭を生やしていた。が、そういう祖父を、ぼくはその後もずっと見慣れているので、幼いときに祖父をどう見ていたか判然としないのだ。クレゾール石鹼水の刺戟臭の染みた白衣は、ぼくが西大久保から離れて三田に來たという確かな証しであつたし、口髭の頬摺りは祖父と孫の絆を象徴する行為であつた。この世に生れた瞬間のぼくを、多分祖父は産婆のつぎに取りあげた（あるいは最初だったかも知れない）ので、ほんの赤ん坊のときからぼくを数えきれないほど抱いているに違いない。つまりぼくは祖父を思うたびに、いろいろな場面に現れる祖父が、一体いつの祖父の姿であつたかを区別できないでいる。同じように三田の病院についても、そこで起つたあれこれの出来事が、新旧ごちゃごちゃに混り合つてしまひ、きつ

りとした思い出——一つの物語に定着できるような思い出——にならないでいる。

食堂の脇から階段を登って行った二階に祖母の「お居間」があり、祖父の書斎や史郎叔父や夏江叔母の部屋が、いびつな廊下や小階段で結ばれている不思議な空間、長い年月のあいだに増改築を重ねた結果、様式も高さもまちまちになった部屋や廊下の奇妙な連なりを、ぼくは部屋から部屋へ、廊下から階段へと駆け回り、そうして駆けている感覚を確かな過去として実感できるものの、その一つ一つは何十回か何百回かの体験の融合であって、いつのことであつたやら確定できない。

一つ、祖父の遠い追憶としてよみがえってくるのは、ある日祖父の車に乗って誰かを訪問したことである。背の高い箱形の車に乗って、木々の緑が頭上を過ぎて行くのを眺めている。やがて車は大きな屋敷に着き、中から白髪の老人が出てきた。祖父は老人に「これが孫です」とぼくを紹介した。が、老人はぼくを無視して車のほうをほめるのだ。祖父もぼくを忘れて、車の自慢話を始める。たしかに大きな立派なオープン・カーなのだ。車は老人を乗せて発車し、坂道にかかる。するとエンジンの出力が足りず、すこし登った所でエンコしてしまう。ぼくは車に復讐できた喜びと、誇りを傷つけられた祖父への憐憫で胸が一杯になる。

この場面で鮮かなのは木々の緑である。左右から枝を差し伸べる大木の幹の列と濃い緑のアーケードが美しく、ぼくは胸をわくわくさせている。そしてこの緑は非常な速さで後へ後へと飛んで行き、空中を飛翔するような気持を与える。しかし、坂道に來ると、とたんに緑が消え、荒涼とした廃墟のような街になり、そこで車が止まるのだ。それが古い記憶であるのは、白髪の老人にくらべて祖父がひどく若く、元氣一杯であって、「これが孫です」とぼくを紹介するとき、相手の老人の顔に、「あなたはお若いのに、もうお孫さんがいるんですか」という驚きの表情が現れるからだ。そう、ぼくが生れた年は祖父は五十四歳だった。若いおじいちゃまであった。

もう一つ、意識の底から浮び上るのは、祖母と一緒に入浴する情景である。

祖母に抱かれて五右衛門風呂に入る。底板をゆっくりと沈め、ぼくをその上に立たす。板の隙間から浸みだす熱い湯が足の裏をくすぐり、「あついよう」と祖母に鬨り付く。「大丈夫だよ」と祖母は笑い、しゃがむと湯が溢れてきて、ぼくの体が浮き、具合よく祖母の膝の上に乗る。母の乳房は丸いのに祖母の乳房は長くて、腕のようにふわふわ動く。祖母は両手を巧みに使って湯を噴水として飛ばしたり、光の屈折を利用する例の詐欺で指を伸縮させてみせ、もう何度もそれを見せられたぼくが驚く振りをすると喜ぶ。祖母は初孫を風呂に入れるのを大層楽しみにしていた。抱いて体を洗い、とくに髪の毛を洗うのが好きだった。幼い日の祖母を思うと、シャボンの香りや目に沁みるシャボンの痛みや泡立つ体を撫でる祖母の手の感触がまず呼び起されるのだ。

祖父と祖母は、ぼくを連れてあちこちの遊園地に行ったらしい。そのため、幼い日の遊園地を思うと、祖父母が一緒にいた感じがある。山の斜面を利用した長い滑り台を滑り降りているうちに速度がつき、怖くて泣きだす。花壇の縁の石を走っていくと祖母が息を切らして追ってくる。と、転んで鼻血を出し、祖父が医者らしく落着き払って手当をしてくれる。どこかのお花畑で握り飯を食べている。竹の皮の匂いが染みた海苔が何とも香ばしく、色とりどりの花と雲が美しく、尻の下草がぬくもりを帯びて柔かである。握り飯を食べおえるともう一つ差し出したのは母だ。子供は一人で弟たちがいなかったから、随分遠い思い出である。

そして弟たちが出現してきた。彼らは「出現」という唐突な現れ方をしたように感じられる。しかも、いきなり「弟たち」と複数でまわりに存在し始めたのだ。当時年齢は数えで表示する習いであり、ぼくが五歳、駿次が三歳、研三が一歳のころに、「弟たちの出現」を心に止めるようになったので、それ以前の「古い記憶」にくらべると、少しはまとまった追想になってきた差違が認められる。けれどもまとまったと言ったところで、なおそれは脈絡が不充分的うえ、それ以